

仏説大東亜戦争

平成 27 年 9 月 1 日

敏 翁

戦後 70 年を迎えたこの夏は、安倍談話など賑やかだった。

それに促せられる様に私も及ばずながら最近以下に記すような事を空想している。

アカデミズムの世界では、大東亜戦争の目的が東亜の開放であるというのは正確ではないという事になっているが(*1)、私は日本民族の深層心理とその形成の一端を探り、その観点から見たかったのである。

私は、先の大東亜戦争は日本又は大和民族と言っても良いと思うが、それが「東亜の解放」を願って行った捨身布施だったと思っている。どう考えても勝ち目の無い戦争にのめり込んでいった深層心理としては、そう考えるのが最も妥当の様に思えるのである。

「東亜の解法」の文言は、当時東亜諸民族共通の願望だったのであり、それは終戦時の玉音放送にも含まれている。

『朕ハ帝国ト共ニ終始東亜ノ解放ニ協力セル諸盟邦ニ対シ遺憾ノ意ヲ表セサルヲ得ス』

「捨身布施」の考えは仏教に基づくものである。

日本に渡ってきた仏教は大乘仏教で、そこで大切とされた「六波羅蜜」の中でも最も尊重されたのが「檀波羅蜜」で、檀は「布施」である。

尚、波羅蜜とは、仏教における各修行で完遂・獲得・達成されるべきものを指す言葉である。

以下は江口孝夫校注「三宝絵詞」現代思潮社発行(*2) による。

『檀波羅蜜は大乘仏教での修行の大きな特色である。 釈迦時代、つまり原始仏教時代にも説かれたのであったが、それにつづく部派仏教(小乗仏教)となるとほとんど顧みられなくなってしまった。

ところが大乘仏教が起ると、実践すべきもっとも重要なものと説かれるようになった。

この布施には三種あった。 財施・法施・無畏施の三つである。

財施は金銭・財物などの布施、法施は精神的な教法を施し与えることで、教え説きしめすこと、無畏施は人びとに安堵感を持たせることである。

この三施のほかに身施があった。 釈迦が修行時代に自分の身を投げ出して他の生命を救ったり、身体の一部を割き与えて飢えた者を助けたりすることである。 身施は財力や仏法を持たなくてもできる。また無畏施を施すような力量がなくてもできる。

だからだれにも出来るものであるが、またもっともむつかしいものでその犠牲的行為は崇高なものとされた。』

この釈迦の修業時代(前世)の話で良く知られているのは、法隆寺にある国宝「玉虫逗子」に描かれている薩埵王子の「捨身飼虎図」(出典は『金光明経』「捨身品」)と雪山童子の「施身聞偈図」出典は『涅槃経』「聖行品」)であり、そのいずれの説話も、上記「三宝絵詞」に載っている。

この二つの説話に合わせて、「三宝絵詞」の初めにある「檀波羅蜜」(出典は『智度論』)説話の現代訳は、上記赤枠をクリックすればご覧頂ける。

また上記「施身聞偈図」と「捨身飼虎図」をご覧に入りたい。(*3)



左が「施身聞偈図」で、右が「捨身飼虎図」である。

この「捨身飼虎図」が特に有名で、日本民族の資質の表現としては、類稀なものとされている。

以下は、矢代幸雄「日本美術の特質」(第2版 *4)による。

『玉虫厨子の表面を飾る漆絵は、漢代様式までをかなり忠実に伝えること、
かって指摘した通りである。しかしながら、この漢、六朝絵画の線的様式が、玉虫厨子絵においていかに繊細なる日本の神経をもって優美に曲線模様化されたか、まことに驚異すべきものがある。(中略)

かくして捨身飼虎図は、構図のすこぶる微妙なる線的構成によりて観者の心を忽ちに精神美の国に誘引するのみならず、そこに生える樹木、竹林、蔓草の類も、或いは突出する巖石、入り組みたる洞窟も、皆そのままに美しき曲線模様をなし、その間に行動する太子の人物すらも、絵模様の国にふさわしく涼やかになよなよしたる清姿に化している。

断崖の上に、太子が上衣を脱いでそれを樹枝に懸けんとする少し反り気味の長身のごときは、育ち行く少女のほっそりした美しさを持ち、清浄と艶めかしさとの混合を示している。加うるにこれほどに敏感なる曲線模様は、その構成中に内在する旋律を発動せしめて、画面に捕捉すべからざる運動感を自動的に惹き起こし、同時にまた感者の胸裏の琴線にも共鳴を伝え、単に説話の流動的進行を無理なく滑走せしむるのみならず、太子が長身を翻して断崖より飛び降り、虚空に組衣を翻しながら落下する描写のごとき、その揺曳する曲線美をもって、あり得べからざる宗教奇蹟の神秘国に心霊を引き込む感傷的必然性を持っている。』

矢代氏は前掲書で『世界の諸民族のうちに置いて日本人を観察するに、日本人の性情が著しく感性的感情的

なること、しばしば指摘される通りであるが、それが芸術に現われたる場合には、殊に感傷的性格を發揮すると考えられる。』としている。

この心情が常識人では考えられぬ(説話の中の兄たちの言動)捨身飼虎のお話を日本人は愛し且つ受け入れたのではないかと思うのである。

また、四国八十八ヶ所の内第 73 番「出釈迦寺」に、弘法大師幼少期の数ある伝説のひとつ「捨身ヶ嶽」縁起がある。

『それは、弘法大師が“真魚”と呼ばれていた 7 歳の時。我拝師山に登り「私は将来仏門に入り、仏の教えを広めて多くの人を救いたい。私の願いが叶うなら釈迦如来よ、姿を現したまえ。もし叶わぬのなら一命を捨ててこの身を諸仏に捧げる」と、断崖絶壁から身を投じました。すると、紫色の雲が湧き、釈迦如来と羽衣をまとった天女が舞い降り、雲の中で弘法大師を抱きとめた。』

今、そこが「出釈迦寺」奥ノ院「捨身ヶ嶽」となっている。

かくして、これらの説話、伝説、美術などにより、我が民族の心の奥に温められた大義・真理追及の為には捨身布施も辞せずとの共同幻想が大東亜戦争に突き進んだ霊的要因と思われるのである。

そして、この捨身行為を宇宙の最高意思である仏は称え、結果として東亜の開放を実現せしめ、また敗戦に打ちひしがれた日本に、その後の繁栄という幸運を恵み与えたのだと思うのである。

東亜解放については、戦後 70 年安倍談話に関する有識者会議の報告で、『大東亜戦争が東亜解放に繋がったとの主張は正確ではない』としているが、これはやむを得ない政治的配慮によるものだと思う。

日本人の心の奥底にある東亜解放への願いがあったればこそ、敗戦後日本兵がベトナムで対仏、インドネシアで対蘭独立戦争に飛び込んで行き、それ無しでは独立は勝ち得なかったし、この日本兵達の行為も捨身布施としても良いものだと思う。

以上の私論はそれなりのオリジナリティを持っていると思うが、実はヒントを得たものがある。

佐渡両津の若宮神社にある北一輝と弟・吟吉の彰徳碑で、これは昭和 44 年に「北両先生彰徳碑建設会」が建てたものである。

裏に各々の先生についての碑文が彫って有るのだが、北一輝のは「安岡正篤」の撰文である。

その大意は、

『佐渡はかつてから幾多の革命的人物が流瀆されているが、特に順徳上皇と日蓮上人の英魂が先生の心霊に強く力を及ぼした。

そして、天皇と法華経により天地震裂し、無量の菩薩や優れた衆生が現れる革命を期して殺身供養したと察することが出来る。』

この文は、短い文章の中に北一輝の本質と佐渡との関わりを簡潔に表現仕切っていると思えるものだが、これが上述の私論構築にヒントを与えたのである。

私の北一輝探訪記は、下記でご覧頂ける。

北一輝探訪記 佐渡編

北一輝探訪記 東京編

最後に、以上の私論は、集団の捨身という概念が仏教教理上成立するかという問題を含んでいるのだが、私のこの方面の学識には至らぬ点が多すぎ、整合性のある論理構築の見通しは全く立っていない事を申し添えねばならないのが残念である。

注

- *1: 例えば戦後 50 年を迎えて 1991 年 1 月に 4 日間にわたって開催された「山中湖会議」(太平洋戦争の再考察——開戦 50 周年国際会議)が重要な資料である。
この内容は、細谷千博、本間長世、入江 昭、波多野澄雄編「太平洋戦争」 東京大学出版会 全 669 頁に纏められている。安倍談話のベースとなった「有識者会議」の副座長北岡伸一は、ここで「太平洋戦争の<争点>と<目的>」として有識者会議の報告とほぼ同様な議論を展開している。
- *2: 源為憲撰 江口孝夫校注 三宝絵詞 上・下 現代思潮社 1982
三宝絵詞(さんぼうえことば)は、平安中期の仏教説話集。
円融天皇の永観 2 年(984 年)11 月に成立。二品尊子内親王(966 年 - 985 年)のために学者源為憲(? - 1011 年)が撰進。
- *3: ここには、ほぼ同質な 2 幅の画像を掲げなかった。しかし「捨身飼虎図」は各種の美術全集に掲載されているが、「施身聞偈図」は見付ける事が出来なかった。
それで、ここに掲載したものは、「平成の玉虫厨子」と呼ばれるレプリカの画像で、ウェブからとったものである。製作指揮者は 中田金太(故人 高山) 製作年は 2003~2007 年(約 4 年)。
- *4: 矢代幸雄 「日本美術の特質」第 2 版 岩波書店 1965 年発行
本文 754 頁 図録 228 頁